

東アジアの祝祭日

中・日・韓三国の比較

客員研究員 許 昌 福

はじめに

東アジアは一つの歴史的文化圏として議論されてきた。この文化圏は中国を中心とし、その周辺の朝鮮半島、日本、ベトナムから構成され、独特な文化を持っている。東アジア全体に一律な文化が存在しているわけではないが、その共同構成指標に、(1)漢字文化、(2)儒教、(3)律令制、(4)仏教があげられている(西嶋定生)。実はそこにもう一つの構成指標を加えるべきだと思う。つまり、暦である。西暦(グレゴリオ暦)を導入するまで、これらの東アジア諸国では、多少違いはあるものの、ともに中国を中心に発達してきた「太陰太陽暦」を採用していたのである。これらの国々は、今はともにグレゴリオ暦法に基づく太陽暦を使用しているが、年月日や曜日は共通していても、祝祭日は国ごとに異なり、国や宗教、社会発展や伝統文化の影響などにより、さまざまな様態を呈している。一つの国の記念日や祝祭日には、その国の自然観、文化、歴史、政治ないし国家イデオロギーまで、さまざまな要素が集約されていて、その成り立ちや、移り変わりについての研究は、その国の文化や相互理解にも大いに役立つことと思われる。当小論は中・日・韓三国の公休日になった記念日や祝祭日を中心に、その特徴と関連を調べつつ、比較してみる試みである。

多様な暦法

東アジア諸国の記念日や祝祭日について論ずる場合、まずは暦法について簡単に触れておく必要がある。

人類社会の長い歴史の中で、人々は自然の変化、季節の移り変わりや、星座の位置の移動などを前にして、さまざまな暦法を作り出した。これらの暦法は、各自の原理に基づいて構成されているが、大きく分けて三種類に帰属させることができる。つまり、太陰暦、太陰太陽暦、太陽暦である。

太陰暦(lunar calendar)の太陰とは太陽に対して月をいう言葉である。月は人間と一番なじみのある天体として夜空に浮かび、そのはっきりとした周期的な盈虧(満ち欠け)は、明瞭に時の経過をしらせてくれる。だから、この暦法は月(太陰)の盈虧(満ち欠け)の周期である一朔望月を基準にして組み立てたものである。その特徴は、季節と月日との調節を考えず、ただ朔望月によって日を数えることにある。月の位相変化周期は29日12時間44分3秒なので、一ヶ月は約29日半になる。暦法では整数で表示することになっているので、12ヶ月を一年にした場合、それを調整して、ほぼ一月交替で30日と29日の月にし、こうして十二朔望月は約354日になる。これは太陽暦に比べて、一年に11日も短く、32.6年でちょうど一年の食い違いが生じる。

太陰暦は季節と月日との調節を考慮せず、回帰年とも関係がないので、四季の寒暑変化も明確に表示できなく、よく季節とのずれがおこり、日常生活にはたいへん不便である。ということもあって、今は、イスラム圏の人たちが主に宗教的行事に用いているほかには、ほとんど使われていない。中国で回回暦とよばれている暦法は、まさにこの太陰暦である。

太陰太陽暦（lunisolar calendar）は陰陽合暦、陰陽暦ともいう。この暦法は、朔望月と回帰年を合わせて組み立てたものである。その特徴は、月の盈虧周期だけでなく、地球が太陽を廻って運行する周期や、四季の寒暑変化などの要素も合わせて考えることにある。太陰太陽暦での毎月の平均長さは、だいたい一朔望月にあたり、大の月は30日、小の月は29日になっている。毎年12ヶ月あって、平年は354日か355日、平均で回帰年より10日21時間も少ない。そのため2年か3年ごとに閏月を設定し、19年で7回29日か30日の閏月を設置することによってこの問題を解決する。だから、太陰太陽暦の閏年には13ヶ月、384日か385日ある。

太陰太陽暦のことを中国、日本、韓国ではそれぞれ夏暦、農暦、陰暦、旧暦などともよばれている。実は、中国では早くも殷の時代からはすでに太陰太陽暦が用いられ、韓国では百濟時代に中国六朝時代の南朝の「元嘉暦」を採用し、それがまた百濟の暦博士などにより、日本に伝習行用され、飛鳥時代から採用された。中国では、前漢の太初改暦にはじまって、清の「時憲暦」まで、数多い改暦があったものの、太平天国の「天暦」のほかは、すべてが太陰太陽暦に属する。

太陽暦（solar calendar）は陽暦、新暦、西暦ともいう。これは地球が太陽を一回りする時間を基に制定した暦法で、その特徴は、一年の長さは天象によって決め、月の満ち欠けと関係なく、平均長さはおよそ一回帰年にあたる約365.2422日である。いまほとんどの国が使用している太陽暦は古代ローマに始まり、あとローマ法王グレゴリオ13世が1582年に改暦を実施した暦法である。これがいま中国で使われている「公暦」、日本の「西暦」、韓国の「新暦」である。東アジアで一番早く太陽暦を採用したのは日本で、明治改暦によって、明治六年（1873年）から太陽暦を採用したが、それに続いて、韓国も1896年に採用

した。中国での採用は、清朝を倒して中華民国を樹立した辛亥革命以降、つまり1912年からである。

中・日・韓三国は、いろいろな改暦を経て、今はともに太陽暦のグレゴリオ暦を使っているが、伝統的暦法の影響やさまざまな取捨を経て、祝祭日などには、多種多彩な様相を呈し、それぞれの特徴が表れている。つぎは、その各自の祝祭日の特徴や関連などについて、国別に分析してみることにする。

中国：社会主義国家の特徴と伝統文化の共存

中国は東アジア諸国の中で一番早く太陰太陽暦を採用し、また一番遅く太陽暦（グレゴリオ暦）を導入した国である。数千年にわたって使いつづけていた農暦（旧暦）や、長いあいだに形成された民俗習慣や伝統的な影響で、民間的な年中行事は、ほとんど旧暦の日付で行われている。ある意味で、農暦は実は中国の文化の一つである。

中国で発行されているカレンダーなどをみると、ほとんどが陽暦の下に陰暦が書き込まれ、二十四節気もはっきりとつけている。祝祭日などもはっきりと表記されているが、ただ暦注だけは施されていないし、中国で発生したものと言われている「先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口」という六曜なども、いっさい載せていない。中華人民共和国が成立して以来、中国は弁証法的唯物論思想に基づき、迷信的なことについては徹底的に批判し、禁止しているからである。

中国の記念日や祝祭日を全体的に調べてみると、社会主義国家の特徴と伝統文化との共存がはっきりと見えてくる。

1. 「法定曜日」と民間祝祭日

中国の祝祭日は、国が指定している記念日・祝祭日と民間で祝う祝祭日と、二種類に分けられることができる。また、国が指定した祝祭日にも、公休日と公休日になっていない祝祭日がある。

中国では公休日のことを「法定假日」(法律で規定した休日)と言って、土日を除いて一年に10日間ある。それぞれ、1月1日の新年(元旦)1日間、旧暦の1月1日春節(旧正月)3日間、5月1日の労働節(メーデー)3日間、10月1日の国慶節(建国記念日)3日間である。

そのなかで、春節、労働節、国慶節は三日間の連休だが、前後の土日を代休の形で組み合わせると、簡単に七日間の大型連休になり、どちらも「黄金週」(ゴールデンウィーク)になる。多くの人はこの長い休暇を利用して、海外や国内旅行、帰省などをする。毎年、この時期になると、国の旅游局信息中心(観光情報センター)では、ダイヤやホテルなどの観光関係の情報を提供する。国家旅游局、国家統計局なども、毎回のゴールデンウィーク期間の数字を統計して発表する。それによると、今年の「五一黄金週」期間中、中国国内観光者はのべ8710万人に達し、観光収益は331億人民元にも達したと発表されている。こういう経済的効果や、内需拡大、帰省の往復時間などの要素を合わせて、全人代代表から九日間の連休を提案する声もあがってきた。

また、ほかの国と違って、中国の「法定假日」には、一部の社会集団しか休めない休日もある。三八婦女節(国際婦人デー)には婦人が半日、五四青年節(青年の日)には14歳以上の青年が半日、六一兒童節(子供の日)13歳以下の子供が1日、八一建軍節(中国人民解放軍創設記念日)では、現役の軍人が半日休みとなっている。これも日本や韓国の祝祭日にはない特色の一つである。

そのほかに、多くの公休日になっていない祝祭日、記念日もある。二七記念日、五卅記念日、七七抗戦記念日、九三抗戦勝利記念日、九・一八記念日、教師節(教師の日)、護士節(看護婦の日)、記者節(記者の日)、植樹節(植樹の日)などがそれである。また、各少数民族については、その伝統的習慣によっ

て、祝日を少数民族集中居住区の地方政府が決めることになっている。たとえば、チベットの蔵暦新年には、チベット自治区では休みになっている。

ほかの伝統的祝祭日や、外国の影響で流行っている祝祭日などについては、国では一切定めていないし、公休日にもなっていないが、民間レベルでは祝いつづけている。

伝統的な祝祭日には、元宵節(上元節ともいう)、清明節、端午節、七夕、中秋節、重陽節、除夕(大晦日)などがあり、また、外国から伝来してきたものには、情人節(バレンタインデー)、母親節(母の日)、父親節(父の日)、聖誕節(クリスマス)などがある。

以上の祝祭日や、記念日を大きく分けて、国際的記念日、政治・歴史的記念日、伝統的な祝祭日、外国伝来の祝日に分けることができる。

2. 国際的記念日が祝日に

「五一労働節」、「三八婦女節」、「六一兒童節」などは中国伝統的祝祭日と関係なく、もともとはいずれも国際的記念日であった。

「五一労働節」は「五一国際労働節」とも言われ、1886年5月1日、アメリカシカゴの労働者の毎日八時間の作業制度を求める二十万人に近いゼネストに由来する。1889年7月、パリで開かれた「第二インターナショナル」大会で、翌1890年5月1日を期して国際的に示威運動を行うことが決められ、これがメーデーの起源となった。

中国政府は1949年12月に、毎年5月1日を労働節と定め、労働者の祝日として法定休日にした。ただし、3日間の連休と決めたのは、1999年のことである。中国がメーデーを祝日と決めた背景に、国家の基本性質として、憲法に「中華人民共和国は労働者階級が指導し、労農同盟を基礎とする人民民主主義国家である」(1954年『中華人民共和国憲法』)と規定されているからである。「労働者階級を中心とした社会は、中国共産党および国家の

政治的特長であり、……経済、政治、文化などの面で労働者階級と幅広い労働者の権益を保障することは、党と国家のあらゆる活動の基本である」という江沢民の演説からもその主旨が見える（「人民網日本語版」2001年4月29日）。

毎年この期間中には、中国ではさまざまなお祝いの集会や文化イベントなどが行なわれ、国や社会のために大いに貢献した労働模範たちを表彰している。ちなみに、いま中国では知識人も労働者階級の一部として扱われている。

今、世界の多くの国々がメーデーを祝日として祝っている。日本でも国の祝日にはなっていないが、働くものの祭典として、毎年、労働組合によってお祝いの催しや集会が開かれている。

「三八婦人節」（国際婦人デー）も国際的記念日であるが、お祝いをするのは、ただ中国、ロシア、キューバなど少数の社会主義と関係のある国だけである。この記念日も発端は1909年アメリカシカゴの女性労働者たちが自由や平等など政治的経済的権利を求めて、大規模なストやデモを行ったことに由来するが、このことが国際的支持を受け、1910年8月、第二次国際社会主義婦人代表大会で、国際社会主義労働運動の一環として、毎年3月8日を国際婦人デーに決め、女性解放と平和のために闘う国際的連帯行動の日になった。1977年、第32回国連大会で正式に毎年3月8日を「国連国際婦人権益の日と国際平和の日」に決定した。中国では建国してまもなく、1949年の12月に、政務院によって、3月8日を労働婦人節と決めた。

「六一児童節」も実は国際児童節で、中国の「子供の日」である。これは、1949年11月、「国際民主女性連合会」が、世界の児童の権利保障と残害や虐殺を反対するため、モスクワで執行委員会を開いて、6月1日を全世界の子供の祝日と決めたことに由来している。

中国政府は、早くも、1949年12月に毎年6月1日を中国の児童節と決定した。

「子供の日」は日本にも韓国にもあり、ともに5月5日になっている。ただし、日本は西暦の5月5日端午の節句を子供の日とし、韓国も陽暦の5月5日は「オリニナル」（子供の日）であるが、年中行事としての「端午の節句」はべつに「タノジョル」（端午節）と言って、旧暦の5月5日に祝う。だから、韓国では、今年の子供の日は5月5日であるが、端午の節句は6月15日になるわけである。

3. 歴史事件にかかわる記念日

二七記念日、五四青年節、五卅記念日、七七抗戦記念日、九三抗戦勝利記念日、九・一八記念日などは、公休日にはなっていないが、記念日として指定され、中国の国内政治や歴史的出来事に関連している。

二七記念日は、1923年2月「自由と人権」を求めて、鄭州で行われた京漢鉄道労働者の大規模なストライキ；五四青年節は、1919年5月4日、北京の学生が敢行した帝国主義や封建主義を反対する示威運動とそれに続いて全国各地で展開された一連の愛国運動；五卅記念日は1925年5月30日に上海で爆発した全国的な帝国主義に反対する愛国運動を記念したものである。これらの歴史的事件はすべて中国共産党と関係がある。

一方、七七抗戦記念日、九三抗戦勝利記念日、九・一八記念日などは日本の中国侵略と関係がある。七七抗戦記念日は1937年の蘆溝橋事件、九三抗戦勝利記念日とは抗日戦争勝利記念日のことである。これはもともとは8月15日に決めていたが、中国政務院が、日本がポツダム宣言を受諾して、連合国に降伏することを正式に承認して調印したのは1945年9月2日以降になるので、9月3日に決めたのである。

九・一八記念日とは、1931年9月18日起こった「九・一八事件」（いわゆる「満州事変」）を記念したものである。この日から、中国東

北部の民衆は14年にもわたる植民地的な統治を受けることになる。中国はこの日を「国恥日」として記念し、歴史的教訓を忘れず、民族復興をめざすことを主旨にしている。

つまり、これらの記念日は実は中国の近代史の歩みそのものであり、中国共産党の歴史の一部である。中には日本と直接関係ある記念日が三つもある。これも東アジア祝祭日の特徴の一つであって、韓国も8月15日を光復節（解放記念日）とし、日本の植民地支配からの解放を祝い、国の定休日と指定した。朝鮮民主主義人民共和国もこの日を「祖国解放記念日」として祝っている。

4．旧暦で祝う伝統的な祝祭日

中国の伝統的な祝祭日というと、なんと言っても春節（旧正月）で、これだけ公休日になっている。旧暦の1月1日に祝うことになっているので、毎年その月日が違って来る。今年（2002年）の春節は2月12日であるが、2003年は2月1日になっている。

旧正月のことを「春節」と呼ぶようになったのはそれほど遠い昔のことではない。

漢武帝の時、旧暦の正月朔を新年の始まりとし、元旦、元日と呼ぶようになった。その当時太陰太陽暦を使っていたので、その後、二千年ものあいだ、ずっと正月の初日を新年としていた。辛亥革命後、中国では公暦（西暦）が採用され、西暦1月1日を新年とし、農曆（旧暦）正月の初日を春節と定めた。しかし、民間では西暦1月1日を陽暦年、農曆（旧暦）正月の初日を陰暦年とよび、「過年」（年越し）はやはり農曆新年を基準にしていた。1949年9月、中国人民政治協商会議で、「公元紀年法」を通過し、西暦1月1日を正式に元旦と定め、旧暦の元日を「春節」と規定した。

春節はただ中国の最大の祝日としてとどまらず、それを祝うことで一種の中華民族の連帯感や帰属意識を感じさせる役割も果たしている。

世界各国の華人のいるところでは、必ずこれを大いに祝う。中国の香港・マカオ地域はいうまでもなく、華人の多いシンガポール、マレーシアなども公休日になっており、インドネシア政府も去年7月23日政令を發布し、春節を全国的な祝日と正式に規定し、公休日と定めた。

CCTV（中国中央テレビ局）は旧暦の大晦日から始まる「春節聯歡会」（新年交歓会）を、衛星放送を通じて全世界に向けて生中継し、中国では多くの家庭が一家団樂でご馳走を食べながら、その番組を楽しむ。

また、中国では昔から「回老家過年」（故郷に帰って正月を迎える）という風習があるので、改革解放で地方から都市部へ出稼ぎに出てきたが多くの人は、春節ころには、帰省ラッシュのピークを迎え、人口が多く、交通施設がそれほど進んでいない中国では大混雑に落ち、「春運」（旧正月期間の旅客や貨物の運輸）という専門用語まで出ている。

しかし、この伝統的な風習もだんだん変わりつつある。経済的余裕のある人の中には、大型連休を利用して、国内の混雑を避け、海外旅行へいく人も少なくない。コースとしては香港、マカオ地域と、マレーシア、シンガポール、タイ、韓国、ロシアなどが多い。

5．外国から伝わって来た祝日

改革解放にしたがって、外国の祝祭日もだんだん中国で流行るようになってきた。たとえば、「情人節」（バレンタインデー）など。中国ではこの日に、チョコレートではなくて、好きな人に花を贈呈するのが慣わしである。クリスマスも、大学生や若者を中心に祝っているが、カラフルにクリスマス雰囲気を書き添えているのはやはり、商店やレストランである。

全体的に見た場合、中国の祝祭日、とくに公的祝祭日には、政治的要素が多く、社会主義国家としての特徴がはっきりとあらわれている一方、長い歴史をもつ伝統文化も根強く

残っている。

韓国：新・旧暦の共存および儒・仏・基督教の同在

韓国は地理的には、中国と日本の間にあり、中国文化を日本に伝わる掛け橋の役割を果たしていた。また、その過程の中で、韓国固有文化と結びつき、独特な文化を作り出した。韓国の暦や祝祭日からも、その特徴を見出すことができる。

韓国の場合、昔から旧暦を使っていたため、今でも年中行事の殆どは旧暦を中心に行われているし、公休日にも旧暦の祝祭日が入っている。また、高麗時代では仏教が国教だったし、李朝では儒教の朱子学が国教的地位を占め、近代以来はキリスト教が著しく伸びてきたので、その祝祭日の中には、儒教関係、仏教関係、キリスト教関係のものがともに含まれている。

1. 陽暦と陰暦の二重構造

韓国は昔から農業と儒教思想を基にした民族で、ほかの農耕社会である東アジア諸国と同じように、太陰太陽暦を使っていたが、西洋文明が韓半島に押し寄せてきてからは、太陽暦を採用するようになった。李氏朝鮮高宗32年（1895年）、高宗皇帝によって改暦を断行し、陰暦11月17日を開国505年（1896年）陽暦1月1日と設定した。つまり、韓国は1896年から太陽暦を使うようになったのである。

しかし、韓国も中国と同じように、旧暦への執着が強く、ある意味で旧暦の老家である中国をも越えているといっても過言ではない。韓国では、陽暦を使用しているものの、年中行事がほとんど陰暦で行われ、それに誕生日や先祖の祭祀などさえも引き続き陰暦の日付で行われている。

韓国の公休日には、旧暦で祝う祝祭日が三つある。ソルナル（旧正月）、秋夕（チュソク）および釈迦誕生日がそれである。それに

比べて、中国の公休日では、旧暦で祝うのは「春節」しかなく、日本ではすべて陽暦で祝うことになっている。

旧暦1月1日のソルナル（旧正月）と、旧暦8月15日の秋夕（チュソク）は、韓国人の二大年中行事といわれ、この期間には故郷に帰る人の群れで帰省ラッシュになり、民族大移動ともいわれるほどである。統計によると「ソルナル」には、韓国全人口の50%以上が、故郷に帰省すると言われている。

韓国人にとって、ソルナルは、単に休日だけではなく、元々は祖先崇拜や孝思想を基盤とした、世俗的な時間から神聖な時間へ移る交替儀礼で、祖先の神と子孫が一緒になるとも神聖な時間である意味を持っている。

ソルナルの朝には、行事として、一番初めに茶礼（チャリエ）を行う。ここでいう茶礼は茶の湯の礼儀作法ではなく、旧暦元日で先祖や祖霊にお供え物を用意して行う簡単な祭祀をすることである。それが終わると、祖父母や父母、親戚の年上の方に歳拝（セベ）、つまり拝礼をし、健康と一年間の無事を祈り、新年の挨拶をする。そうすると年上の方は「セベドン」（お年玉）または徳談（ドッダム）つまり励みの言葉で答礼をする。まさに孟子のいう「長幼序有り」（孟子・滕文公）の礼儀作法である。

ソルナルに次ぐ大名節（祝日）は、日本のお盆に相当する旧暦8月15日の秋夕である。秋夕の時期になると、空気が澄み、晴れの日が多く、田畑には五穀が実り、色鮮やかに染まれる。韓国人はその日に、親兄弟や親戚一同で先祖のお墓参りをし、墓の雑草を刈ってきれいにし、お米や果物などを墓前に供えて、祖先の徳を追慕し、収穫と一年間の無病息災に感謝を捧げる。これは朝鮮民俗固有の祝祭日で、古く新羅時代に始まったと伝えられ、収穫を神に祈り、先祖と自然に感謝の気持ちを捧げる節句で、「祖先を崇め親に孝行する韓国の美風良俗」（金渙）の一つだと

も言われている。

旧暦8月15日という中国の仲秋節、日本の十五夜で、お月見の日である。中日とも、古代から仲秋の名月を觀賞する慣わしがあり、伝統的な祝祭日がほとんど陽暦あるいは月遅れに切り替えた日本でも、この日だけは引き続き旧暦で行事を行われている。

2. 祝祭日には儒教、佛教、キリスト教も

韓国の祝祭日のもう一つの特徴として、儒教、佛教、キリスト教関係の日がとも中に含まれていることがあげられる。

祖先祭祀や先祖に礼を尽くし、孝行を行うという意味で、ソルナルも秋夕も実質的には儒教的な性質を持っている。既に述べたように、韓国では、先祖の祭りを重んずる。その方式などは、実は中国から受け入れたもので、生きている親だけでなく、祖先も丁寧に祭る。親孝行という儒教的理念は、日本も、韓国も中国文化から受け入れたが、三国の中でこれを一番よく守っているのはやはり韓国である。

そのほか、国の祝祭日にはなっていないものの、儒教関係の祝祭日として、成均館春季積奠祭がある。積奠（せきてん）とはもともと中国で先聖先師の霊をまつることで言っていたが、後漢以後は孔子およびその門人を祭ることというようになった。春季積奠祭は毎年旧暦2月上丁（上旬の丁）の日に行われることになっている（旧暦8月上丁の日には秋季積奠祭）。これは成均館で行われる古式にのっとった孔子孟子を祭る儀式である。成均館は李朝時代、首都漢城に設置された国立の儒学教育機関で、昔から儒教教育機関として有名で、韓国の儒教伝播に大きな影響力を持っていた。現在は成均館大学という私立大学になっている。

儒教の発祥地としての中国大陸では、いまはこういう祝祭日はないが、中国の台湾地域では公休日として孔子の誕生日にあたる9月28日を教師節（教師の日）と定め、各地の孔

子廟ではこの「至聖先師」を祭る儀式を行われる。日本も古代では、旧暦2月および8月の上丁には大学寮などで、孔子並びに十哲の像を掛けてまつた儀式を行っていたことがある。

仏教関係の祝祭日としては、旧暦4月8日に祝う釈迦の誕生日がある。これは仏教信者たちの祭りで、この日には、信者たちは各地の寺に願をこめた提灯を灯し、仏様を拝み、願いごとをする。全国の寺刹では、提灯行列や塔回りなど、様々な仏教行事が行われ、この日は国指定の公休日にもなっている。塔回りは元来釈迦誕辰に、僧侶と信徒たちが一晩中塔の周囲を回りながら、釈迦の教えと功德を称えて、願いがかなえられるように祈る儀式から由来したといわれている。

釈迦誕生日を祝う慣わしは、インドから中国を経由して、日本に伝わったが、今は中国でも、日本でも韓国のほど盛大ではない。日本にも同じく灌仏会（花まつり）という釈迦の誕生を祝い、甘茶をかける旧暦4月8日寺院で行われる法会があるが、国民の祝日にはなっていない。

実は、もともと、韓国でも宗教的な休日としては、クリスマスしかなかったが、古代からの根強い信仰と仏教徒の強い要求によって、釈迦誕生日という日が正式な休日に指定されたのである。

12月25日は聖誕節（ソントージュル）、つまりクリスマスである。キリストの誕生日を祝う日で、キリスト教の信者だけでなく若者たちの祭りでもある。多くの国がこれを祝うが、東アジア諸国で祝祭日として公休日になったのはキリスト教徒が26.5%を占める韓国だけである。「現代の奇跡」ともいわれるほど、韓国ではキリスト教信者が急速に増え、仏教徒の数をしのいで最大の宗教人口となった。この日には、教会では盛大なミサが行われ、いたるところに教会に掲げてある十字架が目立ち、夜には教会のネオンで輝く。

多様な宗教の祭日を国の祝祭日と指定されている国はそれほど多くないが、アジアでは、多宗教で有名なインドやインドネシアが、釈迦誕生日、イスラム教モハモッド誕生日、クリスマスと世界三大宗教の祝日とも国の公休日として規定している。

3. 神話に由来する建国記念日

10月3日は韓国の開天節（ケチョンジョル）で、日本の建国記念の日にあたる。これは朝鮮半島の開国者として伝わっている檀君神話によるものである。朝鮮開国の伝説には、檀君神話と箕子神話二種類ある。

檀君（タングン）神話では、天神の子桓雄（ファンウン）は地上に降りて熊を美女に化身させ、それを娶り、そのあいだに生まれた男の子が半神半人の檀君で、この檀君が大人になった後、紀元前2333年、平壤城に朝鮮（古朝鮮）という国を築き、1500年間これを治め、その後、山神になったといわれている。箕子（キアイ）についての伝承では、周の武王が殷の王族箕子を華北地方に封じ、朝鮮王としたとされている。これは紀元前108年に漢の武帝が朝鮮に漢四郡をおいたことから、華北の朝鮮王箕子を朝鮮開国の始祖とする伝説である。

二つの伝説は、前者は民間信仰を、後者は儒教を背景にしたもので、韓国では自国文化尊重ということから、民族文化を形成する前者がだんだん有利になった。

檀君伝説に従う場合、韓国の開国は紀元前2333になるので、よく言われている半万年つまり5000年もの長い歴史や伝統を有するとは、これを根拠にした話である。韓国では一時期、檀君を年号にしたこともある。1948年9月、韓国では檀君という年号を公式に使うことを法律で公表し、朝鮮を開国したと言われる檀君の生まれ年を元年にしたものである。これによれば、紀元前2333年が檀紀元年で、今年が檀紀4335になるわけである。だが、その後の1961年12月には、また年号に関する

法律によって、檀紀4295年1月1日を紀元1962年1月1日に改め、今に至ったのである。

日本の建国記念日も、伝説の神武天皇が即位したといわれている年月日を西暦に換算して、紀元前660年2月11日にしたものである。

4. 民族の誇りとしてのハングルの日

10月9日は、ハングルという韓民族の独特な文字を作り出した記念日である。この「ハングルラル」（ハングルの日）は、すべての国民が、今使っている文字の誕生を共に喜ぶことを主旨としている。古代には自国の文字もなく、漢字だけを使っていたから、この日は韓民族にとって独特な意味を持っている。

李朝時代の第4代の王世宗は、若手学者の協力を得て、自らハングルを考案し、1443年に制定し、1446年10月9日に「訓民正音」という名でこれを正式に公布した。朝鮮では、古くから漢字を利用する表記方法「吏読」（リト）文字が工夫され、正式な文字としては漢字が使われていたが、朝鮮語を明確に表現できず、十分な伝達機能を果たせないで、ハングルを広く民衆にも使用できる文字として作られた。しかし、知識人の中には、それに反対する声もあがり、ハングルを「諺文」（オンムン）と卑称していたこともあった。いまは、ハングルは韓国の国字として使い、漢字は学術書や新聞の見出しぐらいしか見えなくなった。また、北朝鮮ではいっさい漢字を使っていない。

「ハングルの日」は1928年、朝鮮語研究会により提出され、1970年6月15日、「ハングルの文化的価値を再認識し、国家的慶祝の雰囲気を作るため」、大統領令により国民の祝日と指定したのである。だが、その後になって休日の多すぎなどの理由で、1990年に法律上、祝日ではなく、記念日とされた。韓国では記念日といえば、祝祭日とは違い、事実上休日にならない。それに対して、「ハングルの日制定の歴史性に対する深層的な検討が不足」として、「ハングルの日」を形式的な記念日と

するのではなく、祝祭日として国の公休日に回復すべだと指摘する人もいる。

日本：旧暦西暦化と天皇制とのゆかり

すでに指摘したように、日本は東アジア諸国のなかで一番早く太陽暦を導入した国であり、完全に近いほど、月齢による旧暦の祝祭日を機械的に西暦に移した国でもある。ただ、元号だけは今でも引き続き使っている。

実は、元号の家元は中国で、前漢の武帝からはじまるが、今は中国では完全に「公元」（西暦）に変えたのである。元号の使用は、歴史的年代について特別な意味や思いやりが含まれているのはいうまでもないが、グローバル化しつつある今の世界で、国際交流などにはとても不便であると言わざるをえない。また、いろいろな記入事項や参考資料を引用する場合も、いちいち西暦に換算しなければならない。せっかく便利な西暦があり、国民の祝日はすべて西暦に祝うようになっているのに、元号を引き続き使用しているのは、外国人にはどうも理解できないだろう。もっとも天皇制度が存在する以上、元号だけは永遠に続きそうである。

1. 旧暦西暦化とその葛藤

日本は西暦の実施により、民間に残っているいくつかの伝統的な年中行事を除いて、ほとんどの祝祭日を西暦に変えている。こうなると、毎年その月日が決まっているので、いちいち旧暦に換算する必要もなく、とても便利である。しかし一方、旧暦での祝祭日は季節や月齢と緊密な関係があるので、すべて西暦に変えた場合、よく季節はずれ現象など、いろいろな「矛盾」が起こる。

たとえば、正月祝いに年賀状を出す場合もそうである。日本は西暦でお正月を祝うので、年賀状は1月1日に着くように出すことになるが、その年賀状にはほとんどが干支の絵柄がかざられ、「賀正」とか「迎春」、「新春のお慶びを申し上げます」などと書く。

実はこれは季節離れの挨拶と言わざるをえない。というのは、旧正月でさえも、春にはなっていないので、西暦の1月1日あたりでは、春はまだまだ遠い存在である。今年（2002年）の旧正月は2月12日で、西暦とは一ヶ月半ぐらいの差がある。また、干支の変わりも、実は旧暦を基準にしている。今年が午の年であるのは間違いないが、始まるのは2月12日、すなわち旧暦の1月1日からで、この前までは西暦2002になっても、やはり巳の年に属し、午の年にはなっていない。たとえば、2002年1月20日生まれの子供の場合だと、日本では午の年生まれになるが、中国や韓国では巳の年生まれになるわけである。また、中国から日本に年賀状を出す場合、国際郵便のことも考えて10日ぐらい前もって出さなければならぬ。こうなると、少なくとも50日ぐらい早めに正月の祝いをおくらなければならない。それに中国の年賀状には「×年吉祥」とか「×年大吉」とよく書くので、まさに「虚構の春を祝う賀状」（岡田芳朗）になってしまう。実は、日本での本当の一年の始まりは、ずっと後の4月の会計年度初めになるべきではないかと思う。

旧暦西暦化の場合、公的な祝祭日はいいが、民間の年中行事などにはいろいろな問題が生じる。まずは、季節的に合わないことである。たとえば、お盆は昔旧暦7月15日を中心に行われていた。旧暦の7月は初秋にあたり、盆踊りは明るい満月のもとで踊るべきであった。しかし西暦の7月15日は真夏である。しかたなく、人々は旧暦の行事を西暦で一ヶ月ずらして行うことにした。いわゆる、月おくれである。しかし、それでも問題が残る。伝統的な年中行事は主に月齢によるものが多いが、西暦では月齢と関係がなく、月の有無とも関係ない。旧暦8月の十五夜、中秋の名月に月見だんごとススキの穂を供えて月見の行事をするが、西暦の8月15日では、かならずしも満月になるとは限らない。2002年の十五

夜は、実は旧暦の七月初七で、満月でなく、上弦になっていて、右半円が輝いているだけである。ちなみに、2004年のその日は旧暦6月30日にあたり、空には満月ところか月の影さえもないはずである。だから、ほかの年中行事は西暦に変えてもいいが、お月見だけは旧暦で行わなければならない。まさに「月々に月見る月は多けれど、月見る月はこの月の月」である。

2. 国民の祝日と天皇制

天皇制との結び付きが、元号だけでなく、祝祭日にも表れている。日本の「国民の祝日」を調べてみると、その中の約三分の一が天皇と関係があることがわかる。

まずは直接天皇という言葉が出てくる祝日には、12月23日の「天皇誕生日」がある。これは平成元年に制定されたもので、もちろん日本国の象徴としての天皇の誕生日を祝う日である。

次は、よく議論されてきた「みどりの日」である。4月29日に祝うこの日は、実は昭和天皇の誕生日で、これも平成元年に制定されたものであるが、もともとは昭和時代の「天皇誕生日」であった。昭和天皇をしのぶ祝日であるはずだが、法定の趣旨としては「自然を親しむとともにその恩恵に感謝し豊かな心をはぐくむ」と書いてある。実はこの「天皇の誕生日」も「旧祝祭日」つまり「祝日大祭日」では「天長節」になっている。昭和天皇のことだけに、この日を「昭和の日」と改称すべきだという提案も出されたが、廃案されたようだ。

「文化の日」も実は「戦前の明治節が衣更えして」(岡田芳朗)できたものである。「明治節」は、戦前は明治天皇の誕生日にあたる11月3日を記念する祝日であった。もともと明治天皇の誕生は旧暦9月22日であったが、太陽暦を採用した明治六年(1873年)以降は西暦に換算して11月3日にした。昭和2年、明治天皇の遺徳を仰ぎ、明治という時代を追

憶する趣旨で、この日が「祝日大祭日」の一つに制定された。「文化の日」と言われているのは、1946年のこの日に新憲法が公布されたことを記念して、「自由と平和を愛し、文化をすすめる」という主旨で、「国民の祝日」に設定された。しかし、憲法というと、これとは別に1947年5月3日の日本国憲法施行を記念して制定された「憲法記念日」がある。「憲法記念日」は多くの国が祝日として設定したが、一年に憲法関係で二回も記念する国はほとんどなく、それもまず憲法施行を祝ってから、憲法公布を祝うことになる。「文化の日」に、天皇から文化勲章を受勲することを思い出す人が多いかもしれないが、憲法のことを思い出す人はどれくらいいるかは疑問である。

もう一つ「天皇」と関係のある祝日は、昭和41年に設定された2月11日の「建国記念日」である。天皇にかぎ括弧をつけたのは、実在だったかどうかも確定できない伝承的な天皇だからである。「日本書紀」の中で、神武天皇の即位した日とする1月1日を、太陽暦に換算して2月11日にしたことに由来する。「日本書紀」での最古の日付として、神武即位前紀甲寅年(前7年)に「冬十月。丁巳朔辛酉。天皇親帥諸皇子舟師東征」と書いていたことから、即位の日付を明治六年(1873年)に換算して、西暦前660年2月11日と決め、皇紀元年とよぶようになった。昭和1967年2月9日にこの日を「建国をしのび、国を愛する心を養う」という趣旨で、正式に建国記念日として制定したのである。とはいっても、あまり根拠のない「建国」をしのぶのは、私には不思議に思える。

韓国の「開天節」も、やはり伝承によるものだが、浪漫的ではあるが、日本のそれよりももっと無根拠である。現在世界に存在する独立国のうち、百十数カ国が建国記念日に相当する日をもっていて、いずれも自国民の民族的解放や、近代国家または社会主義国家と

しての建国を記念した日であり、古代の建国説話に基づく建国記念日は、韓国の「開天節」と日本の「建国記念の日」のみである（赤沢史朗）。

一見、「勤労感謝の日」や「海の日」など、天皇と関係のないように見える祝日も、実はいろいろゆかりがある。11月23日の「勤労感謝の日」は、むかしは「新嘗祭」と言われ、農耕国らしく、「天皇が新穀を天神地祇に勧めて神を祀り、また自らも新穀を食して、その年の収穫を感謝する儀式」を行う日であった（岡田芳朗）。「海の日」も、明治天皇が明治9年東北地方巡幸の帰途、灯台視察船明治丸で、青森から函館を経て横浜に安全についた日に由来している。平成8年から7月20日が国民の祝日「海の日」として制定され、平成15年からは7月の第三月曜日で祝うことになっている。

こういうふうに、現在日本の「国民の祝日」14日の中で、直接天皇とかかわりのある祝日は5日もある。もし、「春分の日」や「秋分の日」など、戦前では「春季皇霊祭」「秋季皇霊祭」と言われていた祝日を加えると、ちょうど半分を占めることになる。これは確かにほかの国では見られない特徴といえるだろう。

むすびに

「文化というのは人間が作り上げた歴史的産物なのだ。だからこそなくなることもあり、生まれることもある」（張起権）。祝祭日も文化の一つとして、こういうことをまぬかれな

いだろう。

農耕を基盤として形成された東アジアの祝祭日は、都市化や、産業化につれて、そのもとの持つ意味がだんだん薄らぎ、もとの中身と関係なく、ただの休日になりつつあることも現実である。たとえば、日本にはハッピーマンデー法があり、成人の日や体育の日につづいて、平成15年（2003年）からは、海

の日も敬老の日も、7月・9月の第3月曜日に祝うことになっている。祝祭日が単に商売や、観光、地域振興などという経済利益のことにと緊密に結びつくようになったのは悲しいことだが、一方、これによって伝統的な祝祭日がもっと華やかで、盛大になり、現代的で、世界的なっていることも事実である。今後、伝統的な祝祭日がどのように生まれ変わり、またどんな新しい祝祭日が生まれるか、これも注目に値することではなかろうか。

（中国・吉林大学東北アジア研究院歴史文化研究所 助教授）

主な参考資料：

- | | |
|-------------------|---------|
| 『中国伝統節日采風』 | |
| Tan Yeting | 冶金工業出版社 |
| 『韓国歳時記』 | |
| 金 渙 | 明石書店 |
| 『韓国民俗への招待』 | |
| 崔吉城 | 風響社 |
| 『暮らしのこよみ歳時記』 | |
| 岡田芳朗 | 講談社 |
| 『暦と行事の民俗誌』 | |
| 佐藤健一郎 ほか | 八坂書房 |
| 『現代こよみ読み解き事典』 | |
| 岡田芳朗 ほか | 柏書房 |
| 『日本の祝祭日を考える』 | |
| 日本の祝祭日を考える会 | 展転社 |
| 『講座日本の民俗学6 時間と民俗』 | |
| 赤田光男 ほか | 雄山閣 |
| 『日本の暦』 | |
| 岡田芳朗 | 新人物往来社 |

